

11 底釣り1 水深の測り方

底釣りとは、エサが水底に着いている状態のことをさします。一番大切なのは、エサを打つ場所の水深を正確に測ることです。手順にそってやってみましょう。



1 竿の長さを決めるため大まかな水深を知る

釣り堀や管理釣り場のように、水深がある程度分かっている場所ではそれをもとにタナ取りができます。しかし、まったく水深が分らない場所では底が取れる十分な長さの竿を出して水深を測ります。大まかな水深を測るには、オモリバランスの取れているウキを仕掛けにセットし、タナ取りゴムを付けてどのくらいの位置でウキが立つか確認します。大まかな水深が測れたら、その水深に合った竿を選んでください。

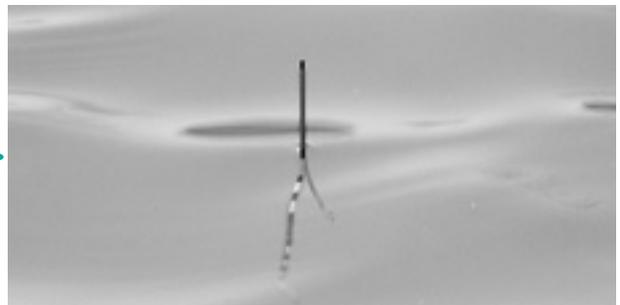


タナ取りゴムには上下両方のハリを刺しておきましょう



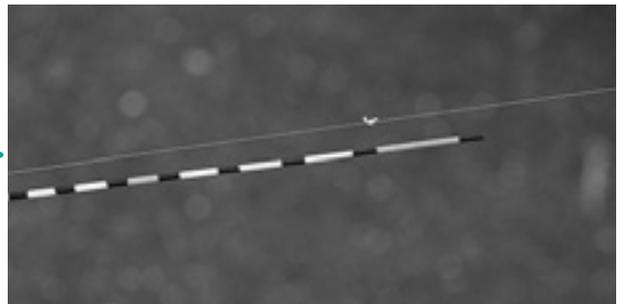
2 トップ先端1目盛りが水面に出るように調節する

竿の長さが決まったら、正確に水深を測ります。あらかじめウキのエサ落ち目盛りを決めておき、ある程度バランスをつけた状態でタナ取りゴムを付け、トップ先端の1目盛りの下側が水面ぎりぎりになるようにウキの位置を調節します。トップ先端が水面に出たら、竿先を数回上下させて常に同じ目盛りになることを確認してください。また、底の状態は常に平とはかぎりません。釣りをする50cm四方を測って、底の状態を知っておきましょう。



3 道糸にトンボ(目印)を付ける

道糸に木綿糸などで、水面に出た1目盛りの位置にトンボを付けます。これで道糸に底までの水深が記録されました。この水深を記録したトンボは動かさないようにしてください。



4 トンボにウキのエサ落ち目盛りを合わせる

トンボは動かさずにウキだけを穂先の方にスライドさせて、あらかじめ決めておいたエサ落ち目盛りをトンボに合わせます。これで上バリトントンのタナにセットされました。次にタナ取りゴムを外した仕掛けを投入し、ウキが水面に出て、エサの付いていない両方のハリが底に着いている状態を確認します。このときのウキの目盛りは、宙で測定したエサ落ち目盛りよりも下のボディ側目盛りが1目盛り前後余分に出ているはず。これは両方のハリが底に着いて、ハリが重さを消えたということ。つまり、宙でのエサ落ち目盛りより下の目盛りが出たということは、正確にタナが測れているという証拠です。この状態から、底釣りをスタートしましょう。

